

在宅医療における薬剤師の存在意義と他職種連携

タイハイ薬局 メディカルモールおぎ店
薬剤師 西 阪 宏 彰

【はじめに】

我が国は超高齢社会をむかえ、医療・介護のニーズが多様化し、従来の「施設完結型医療」から「地域完結型医療」へと、地域包括ケアシステムを構築しようとしている。

高齢者では、加齢による生理機能低下がみられるため、在宅での薬物治療に薬剤師が介入することが必要である。

今回、薬剤師が介入する意義と他職種との連携が在宅医療の質向上に期待できた症例を報告する。

【方法】

87歳男性。S状結腸穿孔により基幹病院にて緊急手術となる。人工ストーマ造設後状態は安定。ADLの向上もみられるが、ストーマや薬剤の自己管理が難いため介入することとなった。ストーマ造設後水様便が改善せずコロネルの投与が開始されたが、水様便は改善しなかった。慢性硬膜下血腫、高血圧、前立腺肥大の既往があり、多剤を服用中であったため、相互作用が考えられた。PPI服用中であったため、胃内PHが上昇し、Ca遊離が抑制し効果が減弱していると考えた。医師に薬剤の変更、あるいは中止を相談し、PPIは中止となった。その後水様便は少しずつ改善した。また、本患者は認知機能の低下で飲み忘れが頻発していた。訪問看護師から血圧が安定しない、水様便がパウチからもれてかぶれる、湿疹が出ているといった報告が度々あった。訪問看護師と相談し、飲み忘れが少ない時間帯に重要な薬を集め、コンプライアンス向上に努めた。

【考察】

人工肛門造設患者は排便コントロールができなくなり、下痢をするとストーマからあふれることもあり患者のQOL低下が懸念される。今回PPIを中止することで水様便は改善したが、軟便の状態が続いている。食事の影響が考えられるため今後は適度な便が出るよう食事や栄養面からもアドバイスしていきたい。また、他職種からの情報収集によりコンプライアンス向上につながった。

本症例のように在宅医療の現場で薬剤師が薬学的知見に基づき、他職種と連携することで在宅医療の質向上が期待できると考える。在宅医療で薬剤師として積極的に介入し在宅患者のQOL向上に貢献していきたい。